

○経産婦あきらちゃんおまけ；

—明け方。

「あの子」の泣き声が聞こえて、あきは目を覚ました。
いつもよりも遠くで聞こえる声に。

(.....あれ.....ああ、そっか)

いつもと違う景色。

そう、もう男の家に来たのだと実感する。

自分を二度孕ませた男の家に、次の子が生まれるまでの責任を果たしてもらいに。

(泣いてる。待たせちゃったかな？いかなきゃ)

いつもは傍らで寝かせていたのだが、男の家のベッドは広いから。

それに.....交わりの声を聴かせたくなくて、隣りの部屋に寝かせたのだった。

急かすように強くなる泣き声に。

慌ててベッドから降りると、パジャマの乱れを直しながら駆け寄る。

その眼差しは年と不相応に、すっかり母としてのそれだった。

「お待たせ.....ごめんね」

吸いつかれるままに授乳させる。

(すごい飲んでる。この子も不安だったのかな)

時計を見る。

この子にお乳をあげて。

そして朝食を作って。

シャワーを浴びて。

そうしたら、今日は休みだ。

この子と一緒にみんなに会いにいこうか、そんなことを考えていたあたりで。

「やあ、あきらちゃん、おはよう」

「.....おはよう、ございます」

そのあたりで男が起きてきた。

昨晚と同じ、ニヤニヤとしたいやらしい笑顔で。

朝立ちしている肉棒をみせつけながら。

昨晚もあれだけして足りないのかと、あきは内心呆れながら顔をこわばらせる。

「.....待って、くださいね」

「もちろん、急かしたりしないよ。ゆっくりあげておくれ」

寝起きのあきらに、明らかに欲情した気配。

しかし、手は出してこない。

授乳の時間。

この時間だけは、あきは男に対しても譲ることはなかった。

以前泣き出した子を放置させようとしたところ、本気で怒ったあきらを見て以来、

男もこの時間に口出しすることはなくなった。

母になった故のことだろうか。

そんな強さを男もむしろ微笑ましく思い、素直に見守っているのだ。

「J Cの授乳姿、画になるねえ。それも娘もあきらちゃん似だからなあ、かわいいもんだ」

「.....」

ゲスな言葉をちよくちよくなげかけるけれども。
あきは目を伏せるだけで、気にせず優しくわが子をあやし続けた。

「はい、落ち着いた？ 落ち着いたら、またおねんねしようね……」

乳首から口を離してうとうとしはじめたわが子。
その背中を慣れた手つきであきはとんととなでさする。

「かわいいもんだねえ」

「……はい」

ほどなく、腕の中の子供が寝息をたて始める。
そのあたりでようやく、あきはどこかこわばらせていた表情を緩めた。

「あの、あとはお乳、しぼってきますね……」

そのまま。子供をベッドに寝かせると、逃げるように風呂場へと歩を向ける。

「うん？ まだひとりあげる子がいるだろう？」

だが、そんなあきの行く手を体で遮りその細い腕を掴むと、男は子供っぽいしぐさで自分の顔を指差して見せた。

「……」

「くれないなら無理やりでももらっちゃうぞー？」

「……」

あきの返答はない。
男ももとより待つつもりはないらしく、その小さな身を抱えあげる。

そして広いテーブルの上で。
少女を押し倒して、その乳房にむしゃぶりつく。

「ふふ、あきらちゃんが朝ご飯だぞー、なんてねえ。

うちにきてくれたらやってみたかったんだよね」

「……うう……」

「あきらちゃんも、おっぱい吸われるのって嫌いじゃないでしょ？」

「……」

「だんまりか。でもそれが答えだよ？ あきらちゃん、違うことは言うもんね」

「んっ……」

「ほら、いい顔してる。余さず吸わせてもらうからねー、ほらほら」

「んっ、やあ……歯、たてないでください……」

「甘噛みだし、気持ちいいでしょ？」

「んっ、んう…やあ……」

そして、男が満足するまで吸われた後は。

「ふふ……意外と出るんだよねえ。こりやしほらないといけないわけだ」

「あの……自分でしほらせて、くれませんか」

「だめだよ。あきらちゃんいつも急いでしぼってるでしょ。

おじさんがたっぷり優しく最後までしぼってあげるから。ね？」

「……」

お風呂場で、男と体を流しあいながら。

体の割りには膨らんだ乳房、その中の母乳をあますことなく搾られる。

確かに、今回の妊娠後は男に日々揉みしぼられているせいで母乳の出がいい。
検診の度、医者にも毎回褒められる。
なんとなく頼なのだが、あの子のためにはいいのだろうか。
そう考えて、拒みきれずにあきらは男に搾られるがままだった

そして.....母乳を搾られ終えた後は。

「あの、中には.....」
「わかってるって、ねっとりだしてあげるから。
お腹の中の子にもパバミルクあげないとねえ」
「うう.....」

胸を揉み尽くされた後で。
ハメられてしまえば、快樂には抗えない。

そんなあきらの性格を、男はよくわかっていた。

すでに、胸をしゃぶられながら。
しぼられながら。そしてハメられながら。
男に開発された体は、何度か絶頂を迎えていた。

「どうして、そんなにお腹、なでるんですか.....」
「あの子の時は大きくなってところ、じっくり見れなかったから感慨深くてね」

快樂に痺れた頭の中、いやらしいがどこか優しい.....そう思ってしまう男の手つきと言葉に、あきらの心と膣の奥が疼く。

「あー、たまらないな。一人産んだのと、またデキちゃったのが合わさるとこんなになるんだなあ。
あきらちゃんの中、とろける感じのやわらかさでさ.....おじさん我慢できないよっ.....うっ！」
「あ.....だめ.....！」

もう〇ヶ月。
ふくらんだお腹をねっとりとなでながら、男はたっぷりとあきららの中に射精を開始した。

「あ.....や.....ああ.....」

膣内で脈打つ肉棒と、広がっていく生暖かな精を感じながら。
あきららも涙目になりつつも、甘い声をあげて、また達してしまった。

そんなあきらの横顔を見ながら。
舌をなめずりつつ、男は余すことなくあきららの中に白濁とした欲望を吐き出してゆく.....

「ふー、朝から満足だよ。今日もいい一日になりそうだ」
「.....はあ.....あ、うう.....」

朝から愛でられて尽くして。
抗いつつも、あきらの身体は不思議と充足感に満たされてしまっていた。

「おっと、あの子がそろそろまたぐずりはじめる時間かな？
少しあやしてあげてるから。お風呂あがったら朝ご飯の準備を一緒にしようね」
「.....はい」

なにより。

最近、こうした時間の後は娘とともに愛でる時間を通して。
娘も懐き始めた姿を眺めて。

いやおうなく、自分達は世間でいうところの「家族」なのだと認識する。
.....今の自分の扱いが、「嫁」やら「妻」やら、そう呼称されているものなのだと自覚する。

(.....この子も、かわいがってもらえるよね.....)

同居を始めて早々。
お腹の子に問いかけるようにしながら。
あきらは男との生活に、流されつつ染められてゆくのがあった。